

韋いへん編

愛知大学図書館報

No.38

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、
なめし皮の紐でとじた上古の書物。

学生の学習空間としての新名古屋校舎図書館

図書館長 田川 光 照

新名古屋校舎開設まで秒読み段階に入ったと言ってよい。他の部署に先駆けて図書館の移転はすでに始まった。この原稿を書いている9月上旬には名古屋図書館書庫に所蔵していた図書の外部書庫への移管が終わり、9月16日の外部書庫運用開始を待つばかりになっている。移管の第一段階は予定通りに終わったとはいえ、年が明けてからの第二段階に向けて、調整しなければならぬことなどが山積している。

いずれにせよ、来年4月からは、豊橋校舎、新名古屋校舎、車道校舎の3校舎体制の中での図書館運営となるが、車道校舎については、4階の現車道図書館は大学院専用の図書室へと衣替えになる。外部書庫の運用およびこの衣替えにともない、一般社会人への開放のあり方を含め図書館の運用が大きく変わることになる。

新名古屋校舎の図書館はスペースの関係上、少なくとも2015年3月までは研究用図書は外部書庫での運用となり、ブラウジングができないなどの不便が生じる。ただし、研究用図書でも新規に購入するものについては、購入後ただちに外部書庫に送るのではなく1年間は図書館内のひとつのコーナーに置く予定である。とはいえ、図書館内には学生用図書を中心に配架することから、これまで以上に学生の学習空間としての図書館という側面が強くなる。



開館時間については、8時50分から21時までとする方向で調整中である。現名古屋図書館の閉館時間(通常講義期間)は19時であるから、2時間延長することになる。地理的条件を考えると、遅くまで図書館を利用する学生が増えるであろうと予想してのことである。しかし、学生の行動パターンがどのように変わるかは、始まってみないと分からないというのが実情であるので、開設後しばらく様子を見てから再検討する必要が出るかもしれない。とはいえ、重要なことは学生が積極的に利用したくなるような図書館作りをすることであるのは言うまでもない。

新名古屋校舎において学生たちの主要な学習空間となるのは、厚生棟1階から3階までを占める図書館と教室棟4階のメディアゾーンである。現名古屋校舎と異なって、図書館とメディアゾーンが空間的に完全に切り離されるため、学生にとって不便な面もあろう。その二つの空間の棲み分け自体はそれほど難しくはない。パソコンや視聴覚資料を中心にした空間かどうかということではほぼ明確に区別できるからである。

しかし、棲み分ければよいというものでもない。たとえば、図書館の資料を参照しながら

パソコンでレポートや論文を作成するというような場合、あるいはインターネットと図書館の資料を同時に使いたいというような場合などが当然あるからである。そのような場合には図書館を利用することになるが、自分のノートパソコンを持っている学生については問題ないものの、持っていない学生に対する対応策を考えておく必要がある。また、大学図書館の中には、iPadを貸し出し、青空文庫からダウンロードした電子書籍を読めるようにしているところもあると聞く。そのような例も参考にしつつ、学習環境を整備していく必要がある。

ところで、新名古屋校舎図書館の目玉のひとつとして、「ディスカッション・ルーム」の設置がある。学生がグループ学習をするための空間であるが、現名古屋図書館内のグループ学習室と違って入館してすぐ目につく場所にあり、積極的に利用してもらいたい空間である。3室が作られ、それぞれの特徴付けや運用の仕方について今後詰めなければならないが、学生のグループ学習以外にもいろいろな使い方が考えられうる。その3室の仕切り壁は可動式であるから、1室あるいは2室として使うことも可能である。1室として使えば、参加者が百数十名程度の行事であれば対応でき、学生向けの講演会や、現在名古屋校舎で行われている外国語コンテストやプレゼン・コンテストなどの会場として使うことが考えられよう。

とはいえ、学生が自主的にグループ学習するのに使うというのが基本的な使い方である。この「ディスカッション・ルーム」の設置は、アメリカやイギリスで始まった「ラーニング・commons」というコンセプトが念頭に置かれている。そのコンセプトの背景にはネット世代の学生の台頭があり、その学生たちの学習様式・行動様式に合った学習支援体制を作るということにあったようである。その基本は、快適な環境の中でのグループ学習を通して自ら課題を見だし、解決していくという

自主的で能動的な学習を支援するという点にある。このことからすれば、「ディスカッション・ルーム」は単にグループ学習用の空間として捉えるのではなく、学生たちの学習を支援する空間として捉える必要がある。

もっとも、「学習を支援する空間」という点は「ディスカッション・ルーム」に限らず、図書館そのものについて言えることである。単に学習に必要な資料を揃えたり取り寄せたりするというだけでなく、資料の検索の仕方などについてのアドバイスや、これこれの分野あるいはテーマについて調べたいが関連資料はどの辺りに配架されているかといった質問への対応などは、重要な支援サービスである。ちなみに、今年度名古屋校舎に入学してきた一年生でそのような質問をカウンターでする学生が多く、これはこれまでに見られなかった傾向であると図書館員から聞いている。

この支援サービスをもう一步進めて考えてはどうかと思うのである。たとえば、大学図書館の中には、大学院生スタッフが常駐し、学習上の質問や相談に応じるコーナーを設けているところがある。また、韓国の大学図書館の例であるが、グループ学習用の部屋のひとつに「チュータリング・ルーム」というものを設けているところがある。一人のチューターがついてグループ学習を行うための空間である。

本学では学習・教育支援センターが履修上・学習上の相談に応じるようになってきているが、学生にとってやや敷居が高いのではないだろうか。たとえば、図書館でレポートを作成中に書き方について疑問が生じたといった場合に、すぐその場で気軽に質問できるような仕組み、あるいはグループ学習の際にその場でアドバイスを求めることのできるような仕組みといったものを考えるべきではないかと思うのである。

ところで、新名古屋校舎図書館内には個室ブースが11室作られる。これも目玉のひとつと言えるかもしれない。おしゃべり御法度の静かな図書館というイメージを破るのがワイワイガヤガヤの「ディスカッション・ルーム」であるとすれば、逆にそのイメージを極限化したのが個室ブースである。まさに個室であ

り、誰にも邪魔されずに一人で静かにじっくりと勉強したいという場合には、この部屋を使えばよい。ただし、閉所恐怖症の人には向かないであろう。

この個室ブースの運用の仕方については、今後図書館委員会で検討しなければならない課題のひとつとして残っているが、いずれに

せよ、新名古屋校舎図書館では、従来の閲覧席のほかにそれぞれ特徴のある学習空間を用意している。メディアゾーンを含め、学生にはうまく使い分けてもらいたいと思う。それにつけても、上で触れたような学習支援という観点からの新たな仕組みが必要ではないかと考える次第である。